

第三十回 「全日本中学生水の作文コンクール」 入賞作文集

# 水について考える

主催 国土交通省・都道府県

後援 文部科学省・全日本中学校長会

水の週間実行委員会

独立行政法人 水資源機構

# 「あいさつ」

国土交通大臣 金子一義

自然の恵みである水は、人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、我が国の美しい文化と伝統を育むとともに、私たちの社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源として、今日の豊かな暮らしを支えてきました。私たちは、普段何気なく水を使っておりますが、現代に生きる私たちは、未来に対して、美しい環境に囲まれ、快適に過ごせる社会を引き継ぐという重要な責務を負っており、水の役割の大切さを日常から認識し、行動することが重要となっています。

国土交通省では、水の有限性、重要性に対する国民の関心が高まり、理解が深まるきっかけとなるよう、昭和五十二年から毎年八月一日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」として定め、様々な「水の週間」関連行事を行っております。この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和五十四年からこの行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいは御両親や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

今年も、第三十回を迎え、全国の中学生から一四、九二九編（学校数三三九校）もの応募がありました。応募された作文は、日常生活における水の貴重さや大切さを表現したもの、自らの体験から美しく豊かな水を未来に守り伝えていくために私たちがなすべきことを表現したものなど、水を大切にしていこうとする中学生の皆さんの気持ちがよく表現されており、深い感動を覚えました。このたび、入賞作品三十編を作文集にまとめましたので、より多くの方にお読みいただき、学校や家庭において「水」について考えるきっかけになるよう願っています。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、また御多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚く御礼申し上げますとともに、御協力をいただきました都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々に深く感謝を申し上げます、あいさついたします。

平成二十年十月

## 「水の日」及び「水の週間」について

昭和52年5月31日

閣 議 了 解

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

## 「水の日」及び「水の週間」制定の理由

わが国の水の需要は、生活水準の向上、経済の進展等に伴って近年著しく増大してきたが、一方水資源の開発は次第に困難になっており、渇水時には水不足が生ずることが予想される状況となっている。

このような状況にかんがみ、毎年8月1日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性に対する関心を高め、理解を深めるため諸行事を行うことによってわが国の水問題の解決をはかり、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することとしたい。

なお、諸行事を行うためには、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の上旬が適当であるので、その初日である8月1日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」とするものである。

最優秀賞(一編)

(国) 土 交 通 大 臣 賞 一滴の水への思い

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校三年 大澤阿紋 2

優秀賞(五編)

(全) 日 本 中 学 校 長 会 会 長 賞 荒川とともに 埼玉県 秩父市立大滝中学校三年 千島真実子 4

(水) の 週 間 実 行 委 員 会 会 長 賞 故郷の「雨」と共生する 鹿児島県 学校法人池田学園池田中学校二年 河野文香 6

(独) 立 行 政 法 人 水 資 源 機 構 理 事 長 賞 水不足を経験して 宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校一年 中村由希帆 8

(国) 土 交 通 省 水 資 源 部 長 賞 世界の水問題Ⅱ日本の水問題 石川県 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校三年 堀内彩萌 10

(全) 日 本 中 学 生 水 の 作 文 コ ン ク ル 中 央 審 査 会 特 別 賞 砂漠の国、水の国 青森県 青森県立三本木高等学校附属中学校一年 野坂創一 12

入選(二十四編)

宮城県 石巻市立石巻中学校三年 杉山智香 14 滋賀県 守山市立守山中学校三年 鈴江隆志 26

茨城県 常陸太田市立北中学校三年 小堀真穂 15 京都府 立命館宇治中学校二年 三田優奈 27

栃木県 常陸太田市立北中学校三年 海老根拓馬 16 京都府 立命館宇治中学校二年 西村祐香 28

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校三年 森戸千浩 17 奈良県 山添村立山添中学校二年 山本みか 29

千葉県 松戸市立第五中学校二年 田村洋貴 18 島根県 大田市立第一中学校三年 山田彩花 30

東京都 渋谷区立松濤中学校二年 吉次由美子 19 愛媛県 伊予市立下灘中学校二年 宇津博美 31

神奈川県 横浜市立港中学校三年 小池由莉 20 愛媛県 松山市立日浦中学校三年 北野智愛 32

富山県 高岡市立高陵中学校二年 石井綾乃 21 愛媛県 上島町立岩城中学校三年 山本悠理 33

富山県 高岡市立高陵中学校一年 藤島早紀 22 福岡県 福岡教育大学附属久留米中学校三年 高木瞳 34

石川県 北陸学院中学校三年 林 なな子 23 佐賀県 佐賀県立香楠中学校一年 福山景斗 35

静岡県 興誠中学校三年 東田陽子 24 佐賀県 佐賀県立香楠中学校一年 福山景斗 35

小林太士 25 熊本県 上天草市立大矢野中学校三年 小松野史子 37

第三十回 「全日本中学生水の作文コンクール」ポスター 概要 38

第三十回 「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿 40

第三十回 「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況 41

第三十回 「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移 42

第三十回 「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式 43

最優秀賞（国土交通大臣賞）

一滴の水への思い

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校

三年 大澤 阿 紋

「困っていること、これがないと困るといえるものは何ですか。」

「生活に必要な水です。」

生活に必要な水？…アナウンサーの問いに答えた被災地の人の意外な言葉。食べ物や飲み物をとつさに考えていた僕は驚いた。

昨年夏休み目前の七月、新潟県中越沖地震が起こった。僕の住む群馬県も随分大きな揺れだった。臨海学校で行った寺泊とお世話になった人達が頭に浮かんだ。

「困っている物は水です。手や食器を洗う水もなければお風呂に入ることも出来ない。トイレを流す水もない。」

飲み水や食べ物と比較的早く配給されても、普段の生活に使う水が圧倒的に足りていなかったのだ。水の出ない蛇口を前に食器の汚れを紙で拭き取り、洗い桶にはった僅かな水で濯いでいた。できるだけ紙皿を使うようにしているとインタビューに答えていた。台所横には水の

入った大きなポリバケツ。子供達は真夏の炎天下、空のペットボトルやポリタンクを両手に給水車の列に並んでいた。トイレ用に川の水を持ち帰る親子もいた。僕はTVに映る被災地の様子にショックを受けた。暑い夏に水のない生活なんて考えられなかった。

「ある日突然、一滴も水が出なくなったら、僕達の生活はどうなるのだろう。しかも、いつ水が出るのか見当もつかなければ…」

怖くなった。でもこれは、単なる想像ではない。まさに隣の県で起こっている現実だった。思わず蛇口をひねって流れ出る水を確認した。安全な水の供給に一滴の水の重みを実感した。

夏休み明け、群馬県こどもエコクラブ交流会で初めて間伐体験をした。僕は、前橋市児童文化センター環境冒険隊として、ふだん県内河川の水質調査や樹木の汚れ調べ、絶滅危惧種のサクラ草の保護や培養を学びながら環境保護活動に取り組んでいる。活動を始めて五年目の

今年はいつもと違う意味を持った。

小雨の中、うっそうと茂った森に入ると、高い木々が雨を遮り、霧が舞い湿気が顔に張り付くようだった。林道から一步森に踏み出すと足下がフワフワとして歩きづらい。落ち葉や土が雨を吸い込んで膨らみまるでスポンジの上を歩いているような不思議な感触が足の裏から伝わってきた。いつも舗装された固い道しか歩かないからかその柔らかな不安定さに最初違和感があった。

「なんで、木を切るのだろう。」

間伐という慣れない言葉に疑問を持つと、

「いい森がいい水を作るのです。」

間伐指導員の方から森と水の関わりについて聞いた。ここで降った雨は木々を伝い地面に吸い込まれる。隙間がたくさんある土壌はスポンジの役目をし、森は水を蓄え徐々に河川に送り出し濁水を防ぐ。長い年月をかけて土が微細な汚れをろ過し、ミネラルを含むおいしい水を作るのだ。緑のダムと呼ばれている。

「いい森とそうでない森の違いは？」

「なぜ、森に人の手が必要なのか？」

僕の疑問に指導員さんが丁寧に答えてくれた。病気の木や枯れ木を除き、混み合ひすぎた木を伐採して光を入れなければ、森林の働きも衰えてしまうらしい。森を守る人達の重要性を感じた。山村に人がいな

くなると山が荒れる。山が荒れば水も濁る。河川の水質浄化と水道水の関連性しか知らなかった僕は、森林や林業を営む人々と水の関係に驚かされた。長い年月をかけて一滴のおいしい水を生み出す森の力とその森を守る人々の努力を知った。

緑のダムを守る話を聞き、以前行った奈良俣・藤原ダムとそこで働く人達の話思い出した。これらのダムも洪水を防ぎ、河川に適量の水を提供して濁水を防いでいる。

一滴の水も失う恐ろしさと得る難しさ、一滴の水を生み出す人々の努力。一滴の水に感謝し、守る努力を忘れずにいたいと思う。

優秀賞（全日本中学校長会会長賞）

荒川とともに

埼玉県 秩父市立大滝中学校

三年 千 島 真実子

窓を開けると一番に、ぬれた土の匂いがした。軽快な雨の音は久しく聞いていなかったたので、耳に心地良く思わず聴き入ってしまう。

「雨、やっと降ったね。」

アスファルトを打ちつけ、春の草花をぬらすその雨を父と一緒に喜んだ。

父は市役所の水道部に勤めている。どんな仕事をしているのか、と尋ねたら「地域に安全でおいしい水を供給できるようにがんばっている。」と答えた。そして、改めて父の仕事について考えてみると、日々の生活の中でどれほど父が水と密接に関わっているかに気づかされた。普段めつたに聞くことのない父の携帯電話の着信音も、大雨のときだけはよく耳にする。対応に出た父の声と表情の真剣さから、管理する水道設備に異常が生じたことが窺えた。すると父は例え食事中であっても急いで出かけてゆく。長びく場合は家に帰ってこない日もあ

り、そんな父は大滝のことを本当に大切にしてくれていると感じた。

それをまた更に、強く感じたのは部活の帰り、父の働く水道事務所に立ち寄った時だ。事務所に入る途中の階段で逆さにつるされたてるてる坊主を見かけた。それは晴天を願うものではなく、雨を願っているものだった。雨の降らない日が続いたときに「雨が降ればいいのになあ。」と呟いていた父を思い出す。布で作られた水色のそれは目、口の不ぞろいな縫い目から、手作りであることがわかった。父が作ったのだろう。周りから見れば子どもじみたものかもしれない。でも私は父のみんなが安心して生活できるようにという願いと、大滝のことを大切に思っている気持ちを深く感じた。

ある日、台風により土砂のつまった水路の清掃作業を手伝った。誰も知らないような山の中の作業。父は額に汗を浮かべ働いていた。

「お父さんがこんなに大滝のことを思っているのに、私は何もしてい

ない。私には何ができるのだろうか……。」

作業を続ける父を見ながら私は考えていた。

足を撫でるように流れる川の水は不思議なくらい透き通っていて、思った以上に冷たく心地良かった。しかし、しばらくしてその澄んだ水の未来が不安になるような現実を目のあたりにした。水にまじり流れていくタバコの吸いながら、草むらを見れば落ちていく空き缶が目に入る。水の溜っているところでは、油のようなものが水面に浮き七色に光っていた。不気味なその色に鳥肌が立ち、大滝の川さえ汚れてきていることを知った。大滝を流れる川の水はいつでも、いつまでも綺麗なもので、水質汚染なんて関係ないものだと思っていた。実際には思いこんでいるだけで何もしていないのに。私の住む大滝は荒川の起点がある。この地域の川が汚れているということは、荒川の水質汚染も他人事ではなくなってきた。責任は私たちにもある。」そう思うと、何ができるのかを考えるようになった。荒川のために私たちができること……。

「水道の仕事で何が難しい？」

と尋ねた私に父はこう答えた。

「水道の水は毎日出ているのがあたりまえ。あたりまえのことをあたりまえにしておくことが難しい。」

そうか、と思った。水道の蛇口はひねればいつでも水が出てくる。生

まれたときから当然のことで『もしそうでなかったら。』なんて考えたことすらなかった。しかし、父の答えにこのままの考えではいけない、と気がつかされた。毎日の生活の中に水が溢れていることを「あたりまえ」と思わず、たった一口の水でも大切に使うべき。私は荒川・大滝のために私にできるあたりまえのことを心がけ、この澄んだ川を守っていきたいと思う。そして、綺麗な水がずっと大滝の自慢であればいいと、父とともに願っている。

優秀賞（水の週間実行委員会会長賞）

故郷の「雨」と共生する

鹿児島県 学校法人池田学園池田中学校

二年 河野 文 香

「二カ月に三十五日雨が降る。」

屋久島の雨を体験した「浮雲」の作者、林芙美子が著した言葉です。私が育った屋久島で、その言葉を実感しない人はいないと思います。

屋久島は周囲約一三〇キロの中に九州最高峰の宮之浦岳をはじめとして一八〇〇メートルを越える山々が連なる黒潮の中に浮かぶ島です。その地形から黒潮の海から生まれる水蒸気を集めて、積乱雲に変え大雨を降らすという、水の循環を目の当たりにすることができません。そのような環境の島で私は育ちました。

屋久島の電気は水力発電です。私は、発電施設を見学に行ったことがあります。見学後、家に帰って電気をつけたときには、これが水の力かと感動しました。

屋久島の雨の降り方には、独特なものがあります。同じ島の中でもわずかに五分くらい走れば雨がやんでいたりします。屋久島には、トン

ネルは一〇メートルくらいのもものが一つしかありませんが、「トンネルを抜ければ晴れだった。」という表現もあります。また、四月から五月に降る長雨のことを、新緑を洗い流すように降ることから、「木の芽流し」という風に表現します。

また、屋久島には、霧雨のような雨は少なく、かさが役に立たないほどの「バケツをひっくり返したような」という表現がぴったりの雨が降ります。

大粒の雨で、体にあたると痛いと感じるほどの雨で、道路にぶつかり、はねあがる雨粒でぬれてしまいます。こういった雨が降ったときには、「雨が横から降る」とか「下から降る」といった表現をし、屋久島の人は、雨について細かい表現をして雨に深い関心をよせることで、雨を生活の一部として考えているのだと思います。

台風の通り道でもある屋久島では、水不足や、渇水というのはほと

んど縁のないことです。しかし、屋久島の人は、けっして水を無駄に使ったり、汚したりということはありません。水の島屋久島だからこそ、普段の生活の中で、きれいな水を求めています。

屋久島の川の水は、普通に飲むことができます。私は今まで、日本に流れる全ての川の水も、飲むものだと思ってきました。しかし、日本においては、川の水は飲めない方が多いということを経験して知りました。屋久島のように、飲む水の水が増えるといいと思います。

今はコンビニなどで水を販売したりしていますが、私にはそれも信じられないことです。なんだかもったいない気になります。屋久島の水道水は売っているような水に負けないくらい、とてもおいしいです。

屋久島では、「水が森を育み、森が海をつくる」というテーマで、水の循環をもとに、漁師が植林を行い、森のダムづくりに貢献するなど取り組みが行われています。このような取り組みも、雨が多く、豊かな自然のある屋久島に住む人々に、今日の自然を未来に残そうという思いがあるからこそ、行われているのだと思います。

夏休みには、毎日のように、川に行き、澄んだ水の中にいる、魚たちを追いかけて遊びます。川が毎日澄んでいるのも、雨のおかげだと思います。

そんな、きれいな環境を未来に残すためにも、これからも、水を大切に、生活していきたいと思います。

優秀賞（独立行政法人水資源機構理事長賞）

水不足を経験して

宮崎県 宮崎県立宮崎西校等学校附属中学校

一年 中 村 由希帆

「次は体育館の床を片付けて。急いで!!」

私が水不足を経験したのは三年前。あれは思い出しても大変だったとしかいいようがない『台風十四号』。そのとき四年生だった私は、台風が過ぎ去った後の見慣れた町、穆佐を見て息をのんだ。道路に散らばった家具、本、水につかった家々から出された生活用品、毛布やベッド。これが本当にいつもすごしてきたあの町なのか……。

私の家は高い所にあつたため、水につからずに済んだが、下の方の地区では、家の中の家具を全て失った家族、一階建てだったため屋根に登って避難した家族もあった。学校は二メートルも水につかった。そのため六年生は夏休みに学校の片付けに行き、家がつかった人はそれぞれ自分の家を片付けた。私は家がつからなかつたため、兄と学校の片付けを手伝いに行った。

水につかった後の学校は私の想像よりもはるかにひどかつた。ポコ

ポコになった体育館、先生たちの大切な資料が散乱した職員室、コピー機や放送機器などの機械類が全てこわれた事務室、実験道具が流された理科室、低学年が使う勉強道具の残がい、一匹もいなくなつた。そうじをしていく中で一番つらかつたのは水が出なかつたことだつた。水道から出ない限り、山に雨水をくみに行くか、水が出る家にもらいに行くしかなかつた。水が出ないことがこんなにつらいこととは知らなかつた。

「水につかつた家は大変だろうな……。」

と私は思いながら、一生懸命学校を片付けた。高校生が手伝いに来てくれ仕事ははかどつた。テレビ取材も来た。テレビを見てくれた人たちの励ましのメッセージや募金を見て、がんばろうという気持ちになれた。

片付けはだいぶ進んだ。散乱しているゴミを拾う、重い木材や機械を運ぶ、どれもきつかった。水くみなんか、バケツを両手に山を登る、そして雨水をためる、重いバケツを両手に山を下る、水が必要な所へ持っていく……。これのくり返しだった。腕と足がおかしくなるかと思つた。こんなになんばつても復旧はなかなか終わらず、大変な日々が続いた。やっと片付けが終わりみんなであびた山の雨水はすぐく気持ちよく、今までの疲れを忘れさせてくれた。そして、水道が直り、久しぶりに飲んだ水は、この世のものとは思えぬくらいおいしく、全体にしみわたっていくようだった。

「家が水につかる」という体験をしたことがある人はそう多くないと思う。実際につかっている私でもこの台風は私の人生にとつて何か大きなものになった気がする。水はこんなにあるがたいもので、おそろしいものだと思つてわかつた。水がないと何も生活できないし、水を飲まないと生きていけない。しかし水は一瞬にしてたくさんの人の大切なものを奪ってしまう。友達の中には、教科書やランドセル、大切なものを全て失つた人もいた。おそろしいことである。

こんな体験をした日から、私は水の使い方を考えるようになった。普段なんとなく使っている水だが、どうしたら無駄なく使うことができるだろうか？

考えるようになった時から水を意識して使うようになった。手を洗

うとき、歯をみがくとき、洗たくや皿洗いをするとき……。これだけのことをたくさんの人がすれば……。

今、地球温暖化が問題になっているが、私はこういう身近な所からたくさんの人が考えて、気にするようになればいいと思う。そうすれば、これからの未来が明るく見えてくる気がする。

これからの時代、私達が水を守っていかなくてはならないのだ。

優秀賞（国土交通省水資源部長賞）

世界の水問題Ⅱ日本の水問題

石川県 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校

三年 堀内 彩 萌

「二十世紀が石油の世紀ならば、二十一世紀は水の世紀」という言葉をテレビから耳にしました。私は水の世紀って何？とよくわかりませんでした。それは世界銀行の副総裁であったイスマル・セラゲルディン氏が、「二十世紀の戦争が石油をめぐる戦われたとすれば二十一世紀は水をめぐる争いになるだろう」と予測した言葉でした。一九七〇年代の石油ショックでは、エネルギーを中東の石油に依存してきた先進工業国の経済は、多大な影響を受けました。二十一世紀になった現在に至っても、原油高によりガソリンなどの値上げ、輸入品やティッシュペーパー、また一部の食品などの価格引き上げにつながるなど私達の生活に影響を広がっています。

私達は、普段水がどんなに大切であるかという事は、あまり考えることはないでしょう。それどころか、蛇口をひねれば使いたいだけ水がでてきます。そして、その水も無限にあるかのように錯覚していま

す。それが今私達の生活に大きく影響を与えている石油のように水が扱われるかもしれないのです。

私が住む石川県の南部には、自然豊かな山々に囲まれ、日本に三名山の白山があります。この白山麓の大量の雪解け水は、石川県の水がめとしての役割を果たしてくれています。かつて、金沢では大量のきれいな水が必要とする「友禅流し」が行われていて、加賀友禅が成立・発展した背景には、良質な水に恵まれていたということがあげられています。このように、私はとても恵まれた環境で育ち、それが当たり前のように過ごしてきました。しかし最近私は水について深く考える出来事があったのです。

一年程前、父が仕事の都合で東京に単身赴任が決まり、私は夏休みや春休みに東京に行く機会が増えました。初めて父の住んでいるマンションで冷蔵庫を開けた時、何本もミネラルウォーターが入ってい

て、「あー東京ってやっぱり水買ってるんだ」と思いました。最近では、ミネラルウォーターがスーパーなどで売られている光景は珍しくありません。しかし、水を買ったことのない私にとっては少し不思議でもあり、驚きでもありました。そこで私は、さっそく東京の水を飲んでみる事にしました。「ぬるい・・・少し違う気がするけど飲む・・・」感想は、第一に金沢の水はおいしいなと感じました。第二に、東京の水は思っていたより普通でした。どこかまずくて飲めないという先入観があったのです。

世界に目を向けてみると、ヨーロッパ・北アメリカ・日本などはほぼ一〇〇パーセントの人が安全な飲み水が得られている一方、途上国を中心にアフリカでは六二パーセント、アジアでは八一パーセントにしかすぎないと言われています。何キロも歩いて飲み水とは思えない色の水をバケツにくみ、運んでいる子供をテレビで見たことがあります。以前家族旅行で行ったシンガポールでは、隣のマレーシアから水を輸入していたことに私は驚きました。

まるで安全でおいしい水があつて当たり前のような日本人の考え方は、世界の人から見れば、とても贅沢だと批判が聞こえてきそうです。私達は、このままでいいのでしょうか。

世界の水問題は、一見他人事に感じるかもしれませんが、しかし日本も食糧の自給率を見れば四〇パーセントと低く、残りは食糧生産に必

要な農地と農業用水を海外に頼っている現実があります。世界の水不足は日本にも大きな関わりをもっている以上、世界の水問題に無関心であつてはならないはずです。「水をめぐる争い」などといった悲しい未来にならないように、私達の努力次第できつと地球の未来は変えられるのです。小さな事だけど、節水や汚れた水を流さない、残り湯の再利用など今まで以上に意識して行動していきたいと思えます。

優秀賞  
(全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞)

砂漠の国、水の国

青森県 青森県立三本木高等学校附属中学校  
一年 野坂 創一

どこまでも続く白い砂漠。月の光に照らされてまるで地球ではない別の星に生きているような不思議な気持ちにさせられる。

一昨年の冬休み。僕は小学校一年生まで暮らしたエジプトに四年ぶりに戻った。そこで大好きな「砂漠キャンプ」へ出かけたのだ。

ここでは、ペットボトル一本だけの水を最後の一滴まで大切に使う。夕飯のスープはトマトの煮汁だけです。食器は食後のお茶を沸かした残り少しのお湯と砂で洗う。もちろん、水洗シャワートイレなんて無い生活をする。

朝起きる。バナナとお茶で朝食をとる。黒い鉄鉱石の固まりがごろごろと転がっている黒砂漠を歩く。砂漠は夜は寒いくせに、日中は急に暑くなる。一月といえば、十和田は雪で埋まっているのに、僕は帽子をかぶり、タオルを巻いて日差しを防いでいるのだ。三十分は歩いたのだろうか。日本にいたらここで休んでスポーツドリンクをがぶ飲み

しているところだ。しかし、ここは砂漠である。ペットボトルからほんの少しの水を口にする。わずかな水を大事に、大事に乾いた口の中でゆらす。口の渇きがとれ、水が体温ぐらいになったら今度はゆつくりとのどに流しこむ。これがボク流砂漠の水の飲み方だ。こうして飲む水は牛乳のように味が濃い。「命の水」とはこのことだ。また足を動かせるようになる。

幼い頃は何本もの水を母にねだりながら砂漠を歩いていた僕もやつと「水を大切に使う知恵」を身につけていたのだ。

それから半年も過ぎた小学校生活最後の夏休み。教員をしている父が、

「ちよっと手伝いをしてくれないか。」  
と、言ってきた。小学生のために、田んぼの水はどこから来ているのかという教材を作るというのだ。

夏休みの暑い日だった。父の車は緑色の稲がぐんぐんと育ち、風になびいて芸術作品のように見える田んぼについた。

「この水はどこからきていると思う。」

「近くの川。」

「半分正解。」

続いて用水路をたどった。だんだんと八甲田山に近づいてきた。

「向こうにダムが見えるだろう。この用水路の水もダムの水も水源は同じなんだ。」

もっと上流に行くと川は大きくなった。

そこにはコンクリートの傾斜があり、鉄製の赤い大きな蛇口があった。

「ここが取水口。奥入瀬川の水はここからさっきの用水路に分かれる。」

ゴーゴーという音を立てて川の水は流れていた。冬休みに歩いた砂漠とは正反対の風景だ。

そこから車にのり、十和田湖に着いた。

車を降りて、湖面の見える小高い丘を登った。

「あの鉄門の奥に田んぼの水の水源がある。青ブナ取水口と言って水がるり色に輝く場所だ。」

「水は飲料だけでなく、作物を育て、エネルギーを起こし、観光にも

使われているという事を教えたいんだ。」

葉っぱの陰でよく見えなかった分、僕の頭の中には「青ブナ取水口」の美しい色が想像ができた。

きっと父は、子どもたちをそこに連れて行くんだなと思った。

水の少ない砂漠の地で「水を大切に使う知恵」を身につけることができた。そして水の豊かな十和田で「水を多目的に使う知恵」も知る事ができた。

エジプトと日本。砂漠と水の豊かな街。条件の違う二つの国で生活した僕は、ベドウィンの知恵と十和田湖の水を守り活用している人の知恵を多くの人に伝えていきたいと思った。

# 入 選

## 水と共に生きる

宮城県 石巻市立石巻中学校

三年 杉山 智香

小さい頃の私は、風邪をひいて熱をよく出していた。「熱いよう、のど渴いた。」

半べその私にいつも、祖母が湯冷ましを飲ませてくれた。「また作っておくからね。」

祖母の優しい声を聞きながらコップ一杯の湯冷ましをぐくぐくと飲み干し、また布団に横たわる。お湯を冷ましただけの水。でもそれは、店に並べられているどんな飲料水よりも最高に美味しい飲み物だった。

飲み水としてはもちろん、手洗い、風呂、洗濯など、私達の日常生活の中で、水は絶対に欠かせない大切なものである。作物や植物へも命を与え、私達人間に多くの恵みをもたらしてくれている。しかしその半面、水は時として私達に思いがけない脅威をもたらす。大雨で川が氾濫し、堤防が決壊して家や車が流されている様子をテレビや新聞で目にするところがある。私の住んでいる地域でも時々側溝が大雨であふれる。床上、床下浸水の家も何軒か出る。家の窓から、プカプカ浮かんでいるペットボトルやスナック菓子の袋を見て、「このゴミは、側溝をつまらせ災害をより大きくしていないのだろうか？」と疑問に思った。その思いは、水が引いた後の様子を目の前にしてさらに強くなった。泥や砂だけではなく、ゴミがあちこちに散らばっていた。タバコの吸い殻、ビニール袋、ペットボトルに空き缶。どのゴミもみな水に溶けてなくなることはない。ビニール袋やペットボトル、空き缶は水の流れをせき止め、川を氾濫させる原因になっていないのだろうか。小さなタバコの吸い殻などは、海へと流れ海水の汚染につながらないのだろうか。

以前、家の洗面所の排水管がつまってしまい、水が上手に流れなくなっ

まったことがあった。排水管のパイプを外し、ゴミを取り除くと流れはよくなった。川も同じはずだ。ゴミはいっしょに水の流れをせき止めてしまうかもしれない。家の排水管のパイプを外すように簡単にゴミを取り除くことはできない。水は濁り、悪臭を放ち、川はますます汚れていってしまう。田んぼに引く水も汚れていてはおいしい米は作れない。野菜も同じだ。浄水場では、今よりもさらにろ過を繰り返して、安心して私達が使える水道水になるまでどれくらいの間と費用をついやすのだろうか。そうなれば水道の蛇口をひねれば出ていた水も、いつしかなかなか手にすることが難しいものになってしまう日もやってくるだろう。必要な時にいつでも手に入るものは、意外にも簡単にこの世界からなくなってしまうものかもしれない。

クリーンアップ登校。私を通う中学校では生徒会で週に一度、通学路のゴミを拾いながら登校する活動が続いている。今までは「ただのゴミ拾い」と思っていたが、改めて考えるとこの小さな活動も地域をきれいにするだけではなく、川や海へゴミを流さないこと、水の汚染を防ぎ川や海の生き物を守ること、そして私達の生活の要である大切な水を守っていくことにつながっていくのだと感じた。

小さい頃飲んだコップ一杯の湯冷ましに私に水のおいしさ、そして水は生命の源であることを教えてくれた。限りある資源を大切に、節水を心がけることはもちろんのこと、これからは排水にも気を配りたいと思う。川や海に流されるゴミが一つでも少なくなるように協力していきたいと思っている。きれいな川や海があつてこそ、私達は水と共に生きていけるのだから。

## かけがえのない水

茨城県 常陸太田市立北中学校  
三年 小堀真穂

夏休みになると、毎年のように思い出すことがある。そう、それは小学生の頃、毎日のように遊んだ、小さな川のこと。

私の家の周りは、たくさん山の山に囲まれている。その山の中には、小さな川が流れていて、水中にはたくさん生き物が見られる。

夏休みになり遠くから、いとこが遊びに来れば、真っ先に川へ向かう。山を下り、光を浴びたその川は、透明でキラキラと輝いている。水中をのぞけば、やはり、たくさん魚と岩影に隠れた、カニや小さなエビがいる。魚をいこと夢中でつかまえた。楽しい思い出がたくさんあった、あの川。

そんなことを思い出していると、ふと、思うことがある。「あの川は、私が大人になった時も、今のきれいな川のまま残っているのだろうか」ということ。それが、とても心配になって、祖母に聞いてみることにした。すると祖母は、

「昔遊んだ川は、今よりずっと透明で、魚などの生き物がたくさんいたよ。今は、川にごみが多くなって、生き物が少なくなった。」

と話してくれた。川にごみが多い、それがとても心に残っている。確かにそれは、私も感じていた。川にごみがあるということ、もちろんそれは、私たち人間が持ち込んだものだ。そんなことが繰り返されて、やがて水が汚れていく、そしてたくさん生き物がどんどん減っていく。つまり、私たち人間は、生き物の大切な水を奪っていることになるのではないだろうか。水は、全ての生き物にとつて欠かせないものだから、人間だけの自由で大切な水を汚してはいけないと思う。

また、私の家の畑では、野菜を作っている。スーパーで買った野菜に比べ、みずみずしく新鮮な家の野菜は、とても自慢だ。そして、その野菜を作るためには、もちろん、「水」が使われている。私の祖父は、一年中、真夏の炎天下の中でも、野

菜作りを行い、畑仕事に行くときには、いつも水筒を持っていく。その水筒は畑仕事の合間に飲むもので、長時間の作業では、水筒の中が空になってしまうこともある。そんな時、祖父はいつも

「水を水筒の中に入れてきてほしい。」

と言う。そして、言われたとおりに水を入れ祖父に渡すと、

「ああ、水が一番うまい。」

と水を飲む。水は、人間にとって、生きるために欠かせないものだ。野菜や植物も、それと同じことが言えると思う。野菜が育つためには、水が必要で、水がなければ育たない。つまり、水がなければ野菜は育たなく、野菜ができれば、私たち人間は野菜を食べられなくなってしまうのだ。「水」は、あらゆる生き物の命と命をつなぐリレーのバトンになっている。そのバトンがなくなってしまうえば、リレーは続かなくなってしまうことを考え、一人一人が水を大切にしなければいけないのだと思う。

蛇口をひねれば、あたり前のように水が出てくる、私たちの生活。生活の中で、水に不便を感じることはないため、「あたり前の水」になってしまっているのだと思う。水は、誰でも自由に使うことができる。しかし、みんなの水を一人一人が使わせてもらっている、ということではないのだろうか。今、自分が使った水は、みんなの水であることを忘れないで、責任を持って水を使わなければ、私の大好きな、たくさん魚の思い出がなくなった、あの川も、私が大人になったとき、汚れてしまい、生き物がいなくなってしまうだろう。

まずは、この蛇口から水が出なくなってしまうたら、ということを考え、「あたり前の水」から、「かけがえのない水」にしていきたいと思う。命と命のリレーをつなぐバトン、大切な水をみんなを守っていったら良いのではないだろうか。